



古典芸能研究センターからのお知らせ



神戸女子大学古典芸能研究センター長
川森 博司(文学部 教授)

神戸女子大学古典芸能研究センターは、平成25年4月、新センター長を迎えました。

新センター長あいさつ

神戸女子大学古典芸能研究センターは、平成13年の設立以来、①能・狂言、②浄瑠璃・歌舞伎、③民俗芸能の3分野を柱にして、日本の古典芸能を幅広い視野から研究・分析し、その成果を書物、データベース、講座、シンポジウムなどの形で社会に還元していく活動を展開してきました。本学の位置する神戸は、近隣の西宮、播州、淡路などを含めて、古典芸能の発祥に関わる地域であり、また、海外文化の入り口としての神戸は、日本の伝統文化をグローバルな視野から検討し、海外に発信していくうえで有利な位置を占めているといえます。

能楽、文楽、歌舞伎は、ユネスコの無形文化遺産に登録され、海外からも日本文化の象徴とみなされるようになっています。そのような時代であるだけに、これら古典芸能の諸分野を内外双方の視点からとらえていく必要があります。能における死者の視点からの語り、狂言におけるユーモア、浄瑠璃に見られる細やかな人情、歌舞伎の華麗さ、民俗芸能における静と動の対比、これらは日本の伝統文化の表現であるとともに、国境を越えて通じる普遍的な要素を含んでいます。古典芸能の研究を進めることにより、日本人の自己認識を深めるとともに、諸民族・諸文化が生き生きと共生する道を開いていかねばなりません。

当センターが目指すのは、そのような平和共存に向けた研究のための拠点づくりです。本学教員に加え、学外から各分野の第一線の研究者に客員研究員として協力をあおいで、女子大学にふさわしい「たおやかな力」を表現できるセンターに育てていきたいと思っています。引き続き、皆様のご理解・ご支援をよろしくお願い申し上げます。

平成25年第2回常設展

写真展 平成25年4月「三ツ山大祭」—喜多文庫所蔵写真(昭和48年)と並べて



姫路市にある播磨国総社では、60年に1度の「一ツ山大祭」と20年に1度の「三ツ山大祭」という祭礼があります。このうち「三ツ山大祭」については、本学所蔵の喜多文庫には昭和48年に執り行われた祭礼の写真があり、喜多 慶治氏もその著書『兵庫県民俗芸能誌』で取り上げられています。今年は「三ツ山大祭」の年で、3月31日(日)から4月7日(日)の間に諸々の祭礼が執り行われました。センターでは、「喜多文庫民俗芸能資料データベース」のさらなる発展のため、喜多 慶治氏が調査された民俗芸能の再調査を折に触れて行ってきました。今回は、20年に1度の珍しい祭りであることもあり、祭りの様子を写真やビデオで撮影してきました。第2回常設展では、その調査報告を兼ねて写真を中心とした展示を行います。

場所：古典芸能研究センター閲覧室内 期間：平成25年5月13日(月)～8月30日(金)

新刊の紹介

近世文学研究の第一人者である本学名誉教授 信多 純一先生(平成7～15年度在籍)の著書『現代語訳 完本 浄瑠璃物語』が刊行されました。

「浄瑠璃物語」は日本の中世(鎌倉・室町時代頃)に作られた、源義経と浄瑠璃御前という美しい少女の悲恋の物語です。現在ではあまり馴染みがないのですが、「人形浄瑠璃文楽」の名称はこの物語からきています。この物語は、諸国を旅する語り手によって広まり、文学・音楽・美術・芸能へ大きな影響を及ぼした、たいへん重要な物語なのだそうです。この本では、原文の美しい語り口調は残しつつも、読みやすい現代語に訳されています。この機会に源氏や平家とはまた異なった趣きのある物語を紐解いてみませんか。

書評・掲載記事など

『毎日新聞』(平成25年3月3日(日)朝刊)「今週の本棚」渡辺 保氏

『ダ・ヴィンチ』(平成25年4月号 メディアファクトリー)「注目の新刊情報」



信多 純一著
『現代語訳 完本 浄瑠璃物語』和泉書院
定価(税込):3,150円
発売日:平成25年1月16日 判型:A5 159頁

平成25年度 科学研究費助成事業採択状況

平成25年度の科学研究費助成事業について、新規応募総数約93,000件のうち約26,000件が採択されました。本学園の採択件数は大学27件(継続21件、新規6件)、短期大学1件(新規1件)でした。

科学研究費助成事業は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までの「学術研究」を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」です。独創的・先駆的な研究であるかの審査を経て採択された研究に対して助成が行われます。神戸女子大学の採択金額の合計は42,380千円であり、増加の一途を辿っています。

研究種目	研究代表者	研究課題名
基盤研究(B)	文学部・教授 大谷 節子	能・狂言面の創出と派生に関する学際的研究
基盤研究(C)	文学部・教授 狩野 恭	ジュニャーナシュリーミトラ「主宰神論」の研究
基盤研究(C)	家政学部・教授 瀬口 正晴	グルテンフリー膨化食品の研究
基盤研究(C)	家政学部・教授 堀田 久子	柑橘類搾汁残渣の有効利用について
基盤研究(C)	文学部・教授 木下 由紀子	世紀転換期における形而上的文化交流の形—岡倉天心とヴァーゼニア・ウルフの芸術観
基盤研究(C)	文学部・教授 山内 晋次	硫黄流通からみた古代・中世の日本とアジア
基盤研究(C)	文学部・教授 大橋 喜美子	幼保一体化に向けた保育カリキュラム・モデルの構築
基盤研究(C)	家政学部・教授 山根 千弘	ナノ食品—木質パルプから構造制御されて得た機能性食品材料—
基盤研究(C)	家政学部・准教授 大森 正子	脳機能維持・向上に関わる手芸活動の重要性に関する研究
基盤研究(C)	家政学部・准教授 高野倉 睦子	簡易型高齢女性サーマルマネキンによる着装時の人体—被服間の空気層の計測
基盤研究(C)	家政学部・教授 後藤 昌弘	ジャガイモの品種による物理化学的特性と食味におよぼす要因に関する研究
基盤研究(C)	家政学部・教授 佐藤 勝昌	保育所における食物アレルギー児に対する給食の栄養評価に関する研究
基盤研究(C)	家政学部・教授 栗原 伸公	カプサイシン、ジングロール摂取による高血圧予防のメカニズム
基盤研究(C)	文学部・教授 森 尚也	ベケット作品／草稿におけるテキストと図：ライブニッツの組み合わせ術と存在論の研究
基盤研究(C)	文学部・教授 三保 忠夫	宮内庁書陵部所蔵鷹書についての日本語学的研究
基盤研究(C)	文学部・准教授 吉村(森本) 真美	19世紀イギリスの植民地間ヒト移動と帝国ネットワークの形成
基盤研究(C)	文学部・准教授 野口 和美	米国パブリック・ディプロマシーにおけるフィランソピーと政府の連携に関する研究
基盤研究(C)	健康福祉学部・准教授 津田 理恵子	懐かしさを活用した生きがいの維持・向上—元気高齢者と虚弱高齢者への支援—
基盤研究(C)	健康福祉学部・准教授 佐藤 誓子	食事管理を必要とする慢性疾患患児に対する保育所・学校の給食整備に関する研究
基盤研究(C)	家政学部・准教授 木村 万里子	雑豆由来オリゴ糖鎖の機能性開発と食品への応用
基盤研究(C)	家政学部・教授 田中 紀子	季節変化および食生活・生活習慣に起因するエネルギー代謝変動の定量化
基盤研究(C)	家政学部・教授 狩野 百合子	エキストラバージンオリーブ油の食習慣に基づいた複合的栄養機能の解析
基盤研究(C)	文学部・教授 永渕 朋枝	全集未収資料集の作成による藤村研究の再構築
基盤研究(C)	健康福祉学部・教授 植戸 貴子	親による障害者殺害の予防策に関する実証的研究：知的障害者の親の子離れ支援
基盤研究(C)	健康福祉学部・教授 吉川 豊	糖尿病克服を目指した有機・無機ナノ複合体である高活性金属錯体の探索研究
基盤研究(C)	幼児教育学科・准教授 畠山 由佳子	日本における児童虐待ケースに対する区分対応システムの開発的研究
若手研究(B)	健康福祉学部・助教 松本 衣代	インドネシアにおける小児肥満予防／改善教育健康プログラム開発の試み
若手研究(B)	文学部・非常勤講師 鎌谷 かおる	日本近世近代移行期における内水面漁業の研究—琵琶湖を対象に—

※ゴシック文字は今年度新規採択(7件)

大学院情報

日本穀物科学研究会-AACC International日本支部との ジョイント講演会において大学院生が研究成果を発表



ジョイント講演会で発表する田原 彩さん



学位の授与の様子



自動乳鉢で小麦粉の懸濁液を作成中

平成25年3月8日(金)に神戸女子大学須磨キャンパスで開催された日本穀物科学研究会(注1)とAACC International(American Association of Cereal Chemists:アメリカ国際穀物化学者協会)日本支部とのジョイント講演会にて、神戸女子大学大学院家政学研究科 食物栄養学専攻 博士後期課程の田原 彩さんが「製パンへのセルロース粒の利用と新しい機能導入の可能性」という演題で1時間にわたり講演を行いました。

田原さんは、学部生(山口県立大学)の時に卒業研究のテーマに内麦の地産地消を取り上げ、小麦の消費方法の研究を深めることを目標にして神戸女子大学の大学院に入学しました。その後、管理栄養士でもある田原さんは、小麦粉を使った人の健康を守る食品ができないかということに視点を絞り、体内で消化できないセルロースを使った低カロリー食品としてパンを製造することの研究に取り組みました。博士前期課程、後期課程を通した研究が実り、田原さんは博士(食物栄養学)の学位を平成25年3月に授与されました。あわせて神戸女子大学の大学院生で初めて顕著な学問業績を挙げた学生として学生表彰も受けました。



瀬口正晴教授(左)とともにブラベンダーアミノグラフで小麦粉の粘度を計測中



ブラベンダーフェリノグラフで小麦粉の吸水率を測定中

田原さんは現在、ポストドクター(注2)として学位論文の指導教員であった家政学研究科の瀬口 正晴教授の下で、学部生や大学院生の実験実習の補助をしながら、新たなテーマ「ショ糖脂肪酸エステルを用いたデンプン粒表面の疎水性定量法」の確立を目指して研究を続けています。

(注1)日本穀物科学研究会は昭和49年に設立された関西穀物科学研究会が前身。製粉会社を中心に、関西地区のベーカリーエンジニア、小麦粉関係の企業、イーストや油脂関係の企業の技術者、業界新聞関係者、大学や公立の研究所の研究者などが集まって定期的に開催してきた勉強会を関西穀物科学研究会として発足したのが始まり。穀物科学の発展のため、この分野における研究者・技術者の学術交流と協力関係を促進することを目的に設立された。

(注2)大学の博士課程終了の研究者。主に博士号取得後に任期を決めて大学の研究職に就いている人。

活躍する卒業生紹介

青年海外協力隊を経てアフリカの農村で 道路整備に励む先輩



酒井樹里氏

平成25年6月5日(水)に神戸女子短期大学「キャリアへのアプローチI」(中川 伸子教授、上野 和廣教授 受講生216名)の授業において、世界各国の農村で道路整備の活動を行うNPO法人「道普請人(みちぶしんびと)」の職員としてアフリカ諸国で活躍している神戸女子短期大学第50期卒業生 酒井 樹里氏による講義が行われました。「働き方と生きがいについて—青年海外協力隊、NPO職員、アフリカを通して—」という演題です。

酒井氏は平成21年1月から2年間、ウガンダでJICA(日本国際協力事業団:Japan International Cooperation Agency)青年海外協力隊・村落開発普及員として、ネリカ米(注)の普及や農道補修活動を行いました。任期を終えた平成23年1月には、外務大臣から感謝状が授与され、「JICAボランティア事業参加者への外務大臣感謝状授与式及び懇談会」では帰国ボランティアを代表して活動報告を行った実績があります。

授業では酒井氏はウガンダでJICAの専門家の指導・助言を受けてウガンダ人の同僚とともに農家にネリカ米の栽培を奨励し、栽培されるようになった経緯を多くの写真を提示して講義しました。続いて、ネリカ米の生産者がそれを販売して収入を得るためには道路の整備が不可欠であることも痛切に感じ、その時に道路整備の指導をしてもらったことが縁で、NPO法人「道普請人」の職員になったことを説明しました。酒井氏は現在、ケニアやガーナ、タンザニアなどで道路整備の活動をしています。

NPO法人「道普請人」は、日本の伝統技術「土のう」を使って道路整備を行っています。この整備方法は現地調達できる材料のみで道なおしが可能で、現地の人々が彼ら自身の力で継続して維持管理できるのが特徴であると、その活動についても詳しく説明しました。

酒井氏はJICAとNPO法人「道普請人」の活動を通して、国際協力とは、文化や生活習慣の違いはあるけれど人と人がお互いに足りないものを補い合うことなのだと感じていると話しました。周りの人を大切にすること、感謝する心をもつことをアフリカの友人に教えられたことや現地の体験や魅力を明るく楽しそうに後輩に伝えました。最後に「学生時代の勉強は大切です。興味があることに向かって動いてください」と後輩に励ましの言葉を贈りました。



講義の様子



ウガンダで土のうを使って道路整備を行う酒井氏



講義の打合せをする酒井氏と中川伸子教授



いつも笑いの絶えない現場の風景。ウガンダにて。

(注)ネリカは、new rice for Africa(アフリカのための新しい米)の略。西アフリカ稲開発協会(現アフリカ稲センター WARD)が1994年に開発した稲の一種。水田ではなく畑で育つ稲。干ばつや病気に強く収穫量が多い。生育期間が3か月程度と通常品種より短いので年2回の収穫が可能。

第27回管理栄養士国家試験合格者発表 合格率93.5%

平成25年5月7日(火)に第27回管理栄養士国家試験の合格発表がありました。

神戸女子大学家政学部 管理栄養士養成課程の卒業生139名中138名が受験し、129名が合格、合格率は93.5%でした。全体の受験者総数は20,455名、合格者数は7,885名で合格率は38.5%、このうち管理栄養士養成課程新卒者の受験者数は8,073名、合格者数は6,680名(合格率82.7%)でした。

神戸女子大学健康福祉学部 健康スポーツ栄養学科 坂元 美子准教授の栄養指導の成果報告

第91回全国高校サッカー選手権大会にて京都橘高等学校の準優勝に貢献



坂元美子准教授

神戸女子大学健康福祉学部 健康スポーツ栄養学科の坂元 美子准教授は、平成22年から私立京都橘高等学校のサッカー部の栄養指導を行ってきました。このたび、平成25年1月の第91回全国高校サッカー選手権大会で、その京都橘高等学校がみごと準優勝に輝きました。

同校は米澤 一成監督の指導による機動力に溢れる組織的なサッカーを展開し決勝戦ではPK戦の末、惜しくも準優勝に終わりましたが、選手たちが足をつることなく走りきった戦いぶりは広く注目を集めました。そこには、坂元准教授による栄養指導面のこまやかなサポートが貢献していました。

坂元准教授は、平成23年から部員全員の体脂肪率、身長、体重、ヘモグロビンの数値などを測定し、そのデータをもとにその後の成長にあわせた栄養指導を続けました。また、保護者を対象に食事調査も行い、個々の選手にあった食事の内容をアドバイスしていました。

同校の選手権大会出場が決まり、年末の合宿からは坂元准教授も日程の許す限り帯同して選手のコンディショニングに務めました。

試合に向けた栄養サポートを実施することで、食事の重要性を再認識していただき、米澤監督からは、「どのような環境下でも90分走り続けて足がつかなくなったのは栄養指導のおかげ」と感謝の言葉を頂戴しました。

坂元准教授は、今後もゼミの学生とともにスポーツ選手の栄養面のサポートをより有効的に多方面にわたり行う予定です。



「スポーツ栄養情報処理演習」の授業の様子



授業で学生が考案した試合前の食事



ゼミ活動での骨密度測定の様子



合宿(全国高校サッカー選手権大会前)での記念撮影

「生活プロジェクト演習 I」で企業とコラボレーション

神戸女子大学家政学部 家政学科2年次生対象の授業「生活プロジェクト演習I」(平田 耕造教授、梶木 典子准教授)は、自ら考え行動するとともにその評価を自ら行うことで、企画したプロジェクトの推進能力を身につけることを目標としています。平成24年度後期は7回にわたる授業で、株式会社フェリシモ様の協力を得て「体験型ギフト」開発の企画を行い目標の達成を目指しました。

「体験型ギフト」とは“体験”そのものを贈りものとし、学生は贈りものの価値や意義を再認識し、新たなギフトの創出や企画を行い、そのPRの方法までを考えました。

神戸の魅力は港町であることに由来し、外国の文化が根づいたことで今日の神戸のファッションや食生活などの生活様式が他の地域の人々にとっては魅力になっていることなどの講義を受けました。また、既存の体験型ギフト「陶芸」も体験しました。



体験授業の様子と焼成前の作品

3回目の授業では流通現場を見学し、体験型ギフトのアイデア創出の進め方や企画者の思いを伝えるためには何が重要であるかを学習しました。

そして、1月25日(金)の最終授業で「体験型ギフト エクスぺ」(案)発表会を行いました。

「体験型ギフト」の共通テーマは「ともにしあわせになるしあわせ」です。生活の中で何を体験する時に「しあわせ」を感じて分かち合えるかをグループで考え、贈りもののかたちになるように試行錯誤を重ねました。最終授業の前日まで案を練り直し、プレゼンテーションの練習をしました。発表会では、司会進行も学生が担当し受講学生全員が参加したプレゼンテーションが行われました。株式会社フェリシモ様の5名の方が審査をされ、ひとつのグループの発表が終わるたびに、優れたところと工夫をすべきポイントについての的確なアドバイスをいただきました。

プレゼンテーション力やテーマの着眼点が評価され、日本の文化の視点が盛り込まれた二つのグループのアイデアと、「お母さん世代」の気持ちを生かした「体験型ギフト」を考案したグループの計三つのグループに賞が贈られました。



物流センター見学の様子



株式会社フェリシモ 湯本京子氏にアドバイスを受ける学生たち



高評価を得たグループの発表の様子



プレゼンテーションに対し、質問する学生



発表会での記念撮影



国際交流

交流年表

(姉妹提携等)

1983年	ハワイ大学(米国)	2007年	チェンデラワシ大学(インドネシア)
1993年	ケント大学(英国)	2010年	ウダヤナ大学(インドネシア)
1997年	フライブルク大学(独国)	2010年	西安工程大学(中国)
2000年	華南師範大学(中国)	2010年	カセサート大学(タイ)
2006年	ガジャマダ大学(インドネシア)	2010年	高麗大学(韓国)
2006年	オークランド工科大学(ニュージーランド)	2011年	チェンマイ大学(タイ)
2006年	ピッツァー大学(米国)	2011年	カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校(米国)
		2012年	アイルランガ大学(インドネシア)

オフ・キャンパス・プログラム報告

第1回「オフ・キャンパス・プログラムⅣ」カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校

神戸女子大学文学部 神戸国際教養学科の7名の学生が2012年8月29日から7ヶ月間、カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校集中英語コース(以下CPELI)で英語学習の授業、ボランティアシップ、ホームステイを経験し3月に帰国しました。

神戸女子大学はカリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校と2011年5月に学術交流協定を締結しました。同大学でのオフ・キャンパス・プログラムの実施は今回が初めてです。留学中は、ホームステイ先でホストファミリーと日常生活で英語を話すこと、大学内や地域においてボランティアシップを行うことがこのプログラムの特徴です。



修了証書を手にする学生

CPELIでは様々な国(クウェートやサウジアラビアなど)の学生と一緒に英語を学びました。異文化交流を深められると同時に、学習及び生活の場で、日本語を使わないという環境が大きく影響し、特にリスニング力及びスピーキング力において高い学習効果がありました。

2013年1月から3月下旬までは、英語学習と並行して大学内のアジアセンター、チャイルドケアセンター、キャリアセンターなどでボランティアシップを行いました。キャリアセンターでは、現地のスタッフや学生と一緒にホスピタリティ学部のキャリアフェアの準備やコンタクトリストを作成する仕事にも携わりました。

留学した学生たちは、異なる生活習慣や文化が数々存在することを実感し自分の意見をもつことと同時に自分とは違う考えをもつ人を理解することが大切であることも学びました。帰国後は、一層力を入れて語学学習をするようになり日常的に国際的な政治・経済のニュースを熱心に見聞きするようになりました。また、留学をして母国の文化や歴史を学ぶことが国際交流には不可欠であることがわかり、幅広い教養を身につける努力をしています。



CPELIでの授業風景



ボランティアシップの準備をする学生



CPELIの前で記念撮影

第1回「オフ・キャンパス・プログラムⅢ」華南師範大学



異文化交流を体験できる国際文化祭に参加

神戸女子大学文学部 神戸国際教養学科では2012年8月30日から第1回「オフ・キャンパス・プログラムⅢ(華南師範大学 言語文化学習とサービスラーニングプログラム)」を実施し、2年次生(当時)の小西 明歩さんが約6ヶ月間の留学生生活を終えて帰国しました。

このプログラムは、平成23年度よりサービスラーニングを含む海外体験学習として実施されています。中国での実施は今回が初めてです。

小西さんは教養科目として中国語を履修しています。華南師範大学からの交換留学生の歓迎会に出席した時に留学生との会話がスムーズにできたらよいなという気持ちが高まり、中国で行われるオフ・キャンパス・プログラムに参加することを決めました。

最初は入国手続きから苦労することばかりでしたが、華南師範大学で学ぶうちに中国語も上達し、プログラムの終わりで行うサービスラーニングでは、幅広い年齢層の知的障がいのある人が通う学校と一緒にスポーツや散歩をし、中国語を不自由なく使うことができるようになりました。将来、中国語を生かせる職業に就けるように学習を進めています。